四天王寺国際仏教大学 図書館
http://www.shitennoji.ac.jp/ibu/toshokan/

四天王寺国際仏教大学紀要　第43号（2006年12月）

子どもの証言の信憑性
―事前情報としての知識と尋問方法の影響について―

田　中　晶　子

（平成18年８月22日受理　最終原稿平成18年10月４日受理）

近年子どもが犠牲者や目撃者となる虐待などの事件が増加していることから、子どもの証言の信憑性について関心が高まっている。子どもの証言の信憑性との関係が深く、これまで数多くの研究がなされてきたのが、被暗示性（suggestibility）に関する研究である。被暗示性に関しては、年少児ほど被暗示される程度が大きいことが知られている（Ceci & Bruck,1993）。この被暗示性に関わる要因は多岐にわたるが、これまでは事後情報の効果についての研究が中心であった。本稿では、子どもの知識構造（スキーマやスクリプト）に焦点をあて、事前情報が被暗示性に及ぼす影響について概説した。また、正確な証言を得るための子どもへの尋問方法（インタビュー法）についてもとりあげ、今後の研究について展望した。

キーワード：子どもの証言、被暗示性、知識構造の発達、子どもへのインタビュー法

問題

証言[1)]は、犯罪捜査や司法場面での事実確認で重要な意味を持つものである。証言によって事件解決につながる重要な情報がもたらされることもあれば、誤った証言が誤判や冤罪の原因となることもある。日本では2009年までに裁判員制度が導入される予定であり、近い将来、これまで法の実務に携わることのなかった一般市民が、裁判の過程に参加し、様々な証拠を吟味し、有罪か無罪かの判断を行うことになる。事実認定の際に吟味の対象となる証拠には、事件や事故の加害者や被害者、目撃者などの証言が含まれるだろう。裁判員制度を控えた現在、それら証言の信憑性をどのように捉えるかについては、捜査関係者や法曹関係者などの専門家だけでなく、一般的な関心が向けられると予想される。

法学と関わりが深いと思われる証言の信憑性について、1970年代から心理学の観点からのアプローチが系統的に行われるようになった。特に、Loftusらが行った目撃証言に関する研究（Loftus & Palmer, 1974; Loftus, Miller,& Burns, 1978）が先駆けとなり、主に認知心理学の領域において多くの研究がなされている（例えば、ストレスの効果に関するClifford &

1）ここでは、法廷での宣誓証言だけでなく、面接や事情聴取によって得られる供述も含めて証言という言葉を用いる。また、事件や事故の加害者や被害者、目撃者による供述すべてを表す言葉として用いる。

四天王寺国際仏教大学 図書館
http://www.shitennoji.ac.jp/ibu/toshokan/

四天王寺国際仏教大学 図書館
http://www.shitennoji.ac.jp/ibu/toshokan/

Scott, 1978 やLoftus & Burns, 1982 の研究，目撃証言の正確さと確信度の関係を検証したShaw & McClure, 1996 やBothwell, Deffenbacher, & Brigham, 1987 の研究，事後情報の効果に関するLoftus, 1975 の研究など)。

これまでの研究から、証言に影響を及ぼす要因は多岐にわたることが明らかにされており、それらを系統的に整理し、分類する方法が考えられている。代表的な分類法として、Wells（1978）では、目撃証言に影響を及ぼす様々な要因を、推定変数とシステム変数の 2 つに分類しており、Loftus, Greene, & Doyle（1989）では、人間の記憶過程に基づき、記憶の 3 段階である符号化・貯蔵・検索のそれぞれの段階において目撃証言に影響を与える要因が整理されている。

一方、Kassin, Tubb, Hosch, & Memon（2001)は、これまでの目撃証言研究において検討されてきた要因について、専門家の間でどの程度の信用性を獲得しているか、また、一般的な常識に基づき判断する人々（一般市民）にとってどの程度の信用性を獲得しているかについて調査を行った（原, 2006)。彼らが取り上げた要因の中に、専門家と一般的な常識との間に乖離が見られるものがいくつか示されている。そのひとつに、「子どもの目撃の正確さ」がある。これは、「年少児は大人に比べて目撃者としての正確性が劣る」とする命題に対して、専門家はその信用性が低いとしているが、一般的な常識に基づく判断においてはかなり信用性が高いと判断されることを表している。このように、子どもの証言に対する信用性を低く評価する傾向は、模擬陪審を使った実験においても示されている（Goodman, Golding, Helgesonm, Haithm, & Michelli, 1987)。しかし、子どもの証言であっても信用性が高く評価される場合もあり（Ross, Dunning, Toglia, & Ceci 1990)、性的虐待に関する証言の場合には、逆に子どもの年齢が低いほど信用性が高く評価される（Goodman, Bottoms, Herscovici, & Shaver 1989）など子どもの証言の正確さについての判断は一定ではなく、状況によって異なる評価がなされる可能性も示唆されている。子どもの証言の信憑性については、子どもが犠牲者や目撃者となる虐待などの事件が増加し、「子どもは証人になり得るか」という問題に直面することが増えたことから、近年関心が高まっている。特に性的虐待においては、子どもの証言以外の物的証拠がある場合が少なく、子どもの証言が唯一の証言となる場合が多い（木下，1996)。そのような場合、子どもの証言の信憑性をどのように判断するかは、捜査活動において重要であり、裁判においても争点の中心となるだろう。

Ceci & Bruck（1993)によれば、1980年代頃から、アメリカにおいて子どもの証言についての関心が高まり、多くの研究がなされた。1983年にはアメリカで幼稚園児の証言が争点となって争われたマクマーチン裁判があり、子どもの証言の信憑性について社会的にも関心が高まった時期であった。仲・上宮（2006）によれば、証言能力は欧米では年齢制限などによって信用性が担保されてきた（Brady, Poole, Warren, & Jones, 1999)。例えば、イングランドとウェールズでは、少なくとも 6 歳に達していなければ刑事訴訟における子どもの証言能力は認められ

四天王寺国際仏教大学 図書館
http://www.shitennoji.ac.jp/ibu/toshokan/

四天王寺国際仏教大学 図書館
http://www.shitennoji.ac.jp/ibu/toshokan/

なかった[2]（ミルン& ブル, 1999)。一方アメリカにおいては、個々の事例に応じて予備審問や陪審を通して子どもの証言能力についての判断がなされており、年間で最高13000人の子どもが法廷で証言している（Ceci & Bruck, 1995)。

日本では、刑事訴訟法において、証人になりうる資格（証人適格）を「この法律に特別の定のある場合を除いては、何人でも証人としてこれを尋問することができる」(143条）とあり、原則として誰でも証人適格があり、よって年少者であっても証人適格はある。ただし、体験した事実を認識・記憶・叙述する能力を著しく欠けば、証言能力が否定されることはある（田宮, 1992)。つまり、日本でもアメリカと同様に証言能力は個別的に判断することとなっている。

実際、日本において子どもの証言の信憑性が焦点となった事例は少なくない。なかでも有名なのが、甲山事件である。1974年３月、兵庫県にある知的障害者施設で２名の園児が浄化槽から死体で発見された。この事件は、同施設の保母が犯人として逮捕され、25年に及ぶ裁判の結果、1999年10月に無罪が確定した。この非常に長期にわたる裁判の争点となったのが、事件発生から3年後に検察官によって聴取された園児による証言であった。[3]

また、最近では2004年11月、奈良県で発生した女児誘拐殺害事件の捜査においても子どもの証言が注目された。事件発生後の2004年11月30日付けの共同通信による報道では、被害者が乗り込んだ車について目撃者である２人の児童の意見が分かれ、１人は「黒か紺」の小型車と証言し、もう１人の児童は「白」と異なる特徴を証言したという。捜査本部は似顔絵を使った公開捜査に踏み切れず、大人の目撃者を捜しているとのことであった。このような捜査本部の方針には、子どもの証言への信頼性の低さをうかがうことができ、子どもの証言の曖昧さが問われている。子どもの証言の信用性について、私たちはどのようにとらえるべきなのだろうか。

このような問いに対し、これまでの証言に関する心理学からのアプローチから得られたいくつかの知見を提供することができる。例えば、子どもの証言の信憑性との関係が深く、これまで数多くの研究がなされてきたのが、被暗示性（suggestibility）に関する研究である。被暗示性とは、「符号化・貯蔵・検索そして出来事の報告が、社会的、あるいは心理的要因によって影響される程度」と定義されている（Ceci & Bruck, 1993)。彼らによると、被暗示性は、最初に知覚した情報との相違に気づいている場合もある（意識的な場合もある）こと、事前情報と事後情報の結果起こること、そして、認知的要因と社会的要因から起こることであると捉えることができる。

この被暗示性に関しては、年少児ほど被暗示される程度が大きいことが知られている（Ceci & Bruck, 1993)。被暗示性に関わる要因は様々であり、それぞれについて詳細な検討がなされている。特に、初期の研究において被暗示性は、事件を目撃した後で誤った情報を与えると、

２）子どもの証言を証拠として認めるか否かの判断におけるこの前提事項は、現在では廃止されている。

３）甲山事件については、供述者が年少者であったということだけでなく、知的障害を持っていたという点にも焦点があてられ、その証言の信憑性が争われた。

四天王寺国際仏教大学 図書館
http://www.shitennoji.ac.jp/ibu/toshokan/

四天王寺国際仏教大学 図書館
http://www.shitennoji.ac.jp/ibu/toshokan/

目撃者の記憶が誤った情報に誘導されるように変容する現象としてとらえられていたため（菊野，1996)、事後情報の影響を検討した研究が非常に多くなされてきた。しかし、前述のCeci & Bruck（1993）によれば、被暗示性は事後情報だけでなく、事前情報の影響によっても生じる現象であるとされている。そこで、本稿ではこれまであまり取り上げられてこなかった事前情報、なかでも、子どもの内的な知識構造が被暗示性に及ぼす影響に焦点をあて、子どもの被暗示性についてまとめた。さらに、正確な証言を得るための子どもへの尋問方法についてとりあげ、今後の研究について展望した。

子どもの証言と被暗示性　―事前情報としての知識の影響―

正確な証言を支えるのは、事件や事故に関する出来事の記憶である。記憶の年齢差については、一般的に大人と比べて子どもは記憶力が劣ると考えられている。この記憶の年齢差を規定する要因として、知識量や記憶方略の差、メタ記憶の発達の違いなどがあげられる（ケイル，1990)。したがって、子どもであっても特に豊富な知識を持っている場合や、記憶方略をうまく使えるような状況であれば、大人よりも記憶が優れるという場合もある。たとえば、Chi (1978)は、チェスのエキスパートである子どもとチェスの素人である大人について、チェス盤上にある駒の配置の記憶について検討した。すると、エキスパートである子どもの方が駒の配置の記憶が優れることを見出した。このように、大人よりも子どもの方が豊富な知識を持つような事柄においては、年齢の効果が逆転することもある（同様の結果として、Lindberg，1980)。つまり、既有知識を利用することにより、様々な事柄を効率よく記憶していくことができるのである。

私たちは日常の様々な出来事を，スキーマと呼ばれる既有知識に関連づけて記憶している。Bartlett（1932）によって指摘されたスキーマとは，構造化された一群の概念から成り立つものであり、出来事、シナリオ、行為、事物などに関する過去の経験から得た一般的な知識を表す（Eysenck，1990)。スキーマは、記憶の抽象化を促し、一般的な意味の保持を助けたり、記憶の解釈に影響を与え、不明確な情報を解釈するのを助ける働きを担っている。日常場面では膨大な情報が連続的に与えられるため、スキーマの果たす役割は特に大きいと考えられる。

スキーマなど既有知識が子ども記憶に及ぼす影響について、Mori，Sugimura，& Minami (1996）は、時間の経過にしたがい、もとの記憶がスキーマからの影響を受けることを明らかにした。彼らは、4，5歳児に対し、泥棒が盗みそうなもの（ダイヤの指輪など）と盗みそうにないもの（スリッパなど）の両方を盗んで行った泥棒の話を聞かせた。すると、3ヵ月後の再認テストにおいて、盗みそうにないものに対する正答率のみが低下することが示された。つまり、スキーマに一致するような事柄（泥棒が盗みそうなもの）は3ヵ月後もよく覚えており、逆にスキーマに一致しない事柄（泥棒が盗みそうにないもの）は思い出すのが困難になるのである。また、3，4歳児は5，6歳児よりも、このような知識の影響を受けやすいことも示されている（Leichtman & Ceci，1995)。年少児の被暗示性の高さは、このような知識からの影響の受けやすさが一因であると考えられる。スキーマなど既有知識の持つ、不明確な情報を補完

四天王寺国際仏教大学 図書館
http://www.shitennoji.ac.jp/ibu/toshokan/

四天王寺国際仏教大学 図書館
http://www.shitennoji.ac.jp/ibu/toshokan/

したり、解釈を助けるといった働きが、後の出来事の報告に影響を及ぼしたと考えられるのである。

また、スキーマなど既有知識による補完機能は、別の形でも後の出来事の報告に影響を及ぼす。Brown, Smiley, Day, Townsend, & Lawton（1977）は、小学生を対象に、実在しない民族の男についての物語を聞かせた後、その民族とはエスキモーのことであるという知識を与えるグループと、インディアンのことであるとの知識を与えるグループを設定した。その後、物語の内容について口頭再生させると、実際には提示されなかった文章が再生（虚再生）された。これは、事前に与えられた知識から推測された事柄を、実際に物語にあったと誤って思い出すという現象である。さらに、その誤って思い出された内容には、事前に有する各民族についての知識の影響が見られた。例えば、もとの物語の「天気が悪かった」という内容を、エスキモー条件の子どもは「寒くて凍えそうだった」などと報告し、インディアン条件の子どもは、「暑くて乾燥していた」などと報告したのである。

他にも、Landis（1982）は、7歳児と10歳児に人物についての物語を聞かせた。その際、あるグループには歴史上の人物が登場する場合（例えば、リンカーン）の物語を聞かせ、別のグループには、歴史上の人物が登場しない場合の物語を聞かせた。その後、再認課題を行ったところ、歴史上の人物が登場する場合の物語を聞かせたグループは、実際に提示された文章と、実際には提示されていないが、そこに登場した歴史上の人物についての有名なエピソードである文章との混同が示された。つまり、実際には提示されていない有名なエピソードを、実際に提示された文章であると誤って思い出したのである。これらの研究結果は，日常生活における記憶は「本当に起きたこと」を記憶しているというよりもスキーマなど既有知識から推測される「起こりそうなこと」や「起こってもおかしくないこと」を含む一般的なかたちで記憶され、思い出されることを示唆していると考えられる。

しかし、なかったものを「あった」と報告してしまうという側面は、証言においては重大な問題となる。事件や事故の証言においては個別の出来事の正確な報告が求められるため、一般的にありそうな事象を「あった」と報告してしまうのは重大な誤りとなるからである。つまり、証言では、経験した出来事とスキーマなど既有知識などから推測した出来事の区別を厳密に行う必要があると考えられる。

そのような区別を行う認知過程を、リアリティモニタリング（Reality monitoring）と呼ぶ（Johnson & Raye, 1981）。リアリティモニタリングは、保持されている記憶の情報源（ソース）を確定していく判断プロセスの一種で、記憶された情報源が外的（外的記憶）か内的（内的記憶）かを判断するプロセスである（Johnson, Hashtroudi, & Lindsay, 1993）。外的記憶とは，実際に遂行された行為，現実に知覚された事物についての記憶をさす。一方、内的記憶とは頭の中で想像したり推測された事柄についての記憶をさす。つまり，実際に知覚した出来事の記憶（外的記憶）であるのか、スキーマなどから推測、補完された記憶（内的記憶）であるのかを判断する過程なのである。記憶の情報源を確定していく判断プロセスの観点から見ると、前述のBrown, et al.（1977）やLandis（1982）の結果は、正確なリアリティモ

四天王寺国際仏教大学 図書館
http://www.shitennoji.ac.jp/ibu/toshokan/

四天王寺国際仏教大学 図書館
http://www.shitennoji.ac.jp/ibu/toshokan/

ニタリングに失敗した結果であると捉えることができるだろう。したがって、経験した出来事とスキーマなど既有知識から推測した出来事の区別を厳密に行うためには、正確なリアリティモニタリングが不可欠であると思われる。

このリアリティモニタリングは、大人でも困難な場合が多いが（Barclay & Wellman 1986; Roediger & McDermott 1995)、特に幼少の子どもにとっては、実際に見たことと想像したことの区別が難しいことが示されている（Parker, 1995)。また、Foley & Johnson（1983）では、幼少の子どもについて、実際に行った動作と動作したことを想像した場合の区別が難しいことが示されている。さらに、これらの研究は、年少児であるほどリアリティモニタリングが困難になることを示している。このようなリアリティモニタリング能力の未熟さが子どもの被暗示性を高めるもう１つの要因であると思われる。

ところで、スキーマなど既有知識はいつ頃から獲得されるのであろうか。ある状況における一連の出来事についての知識をスクリプトと呼ぶが、Nelson（1996）は、３歳児が時空間的に構造化されたスクリプト的な知識を持つことを示しており、かなり初期の段階から子どもは構造化された知識を持つことが示されている。また、Fivush（1984）は、幼稚園児が登園２日目には幼稚園で何があったのかについて一般的で組織化された報告ができることを示しており、出来事の経験から非常に早い段階でスクリプトの形成が見られることが明らかになっている。藤崎（1998）においても、幼稚園での１日の流れについての一般的出来事事象[4)]（GER）が４，５歳児には既に形成されていることが示されている。

このような一般的なスクリプトが形成される過程で、特定の出来事の中だけでしか体験できないような特殊な経験は忘れられやすくなり、一般的なスクリプトに対応したことしか思い出せなくなってしまうという傾向が示されている。たとえば、Nelson & Ross（1980）では、一般的記憶にアクセスする能力は３歳児でもあるが、特定の記憶にアクセスする能力は４，５歳児間で増加することが示されている。また、自己や他者の行為や内的状態を尋ねられた際、特定の時のことをたずねられているにも関わらず、一般的なよくあることで答えてしまう割合が３歳，５歳ともに高く、低年齢児ほど特定的な答えの比率が低いことが示されている（Eder, Gerlacj & Perlmuttter 1987; Eder, 1989)。これらの結果から、スクリプトなど既有知識の獲得過程にある子どもは、特定の記憶にアクセスすることが難しいことが示唆されている。子どもの供述が、ある特定のエピソードをあらわしているのか、それとも一般的によくある出来事をあらわしているのかの判断も、証言の信憑性を考える上で注目すべき点であると思われる。

４）藤崎（1998）では、幼稚園での１日の流れは、Schank& Abelson（1977）で示されているスクリプトの定義のうち、目標をめぐって組織化されているという要素を満たしていないため、園生活スクリプトと呼ぶのはふさわしくないとして、一般的出来事表象（GER; Nelson & Gruendel, 1981）の用語を用いている。

四天王寺国際仏教大学 図書館
http://www.shitennoji.ac.jp/ibu/toshokan/

四天王寺国際仏教大学 図書館
http://www.shitennoji.ac.jp/ibu/toshokan/

子どもへの尋問方法　―質問方法と誘導の影響―

前述のように、Wells（1978）は目撃証言に影響を及ぼす様々な要因を、推定変数とシステム変数の 2 つに分類した。推定変数とは、目撃記憶の正確さに影響を及ぼすが、実際には統制できないためそれを推定する以外に方法がない変数である。これは目撃証言を得る段階（聴取段階）ではコントロールすることができない変数をさす。一方、システム変数とは、司法機関の側で直接コントロールが可能な変数である。システム変数には、目撃者への質問の構造や暗示的な尋問、ラインナップと呼ばれる犯人識別の方法などが含まれる。この分類法に基づき、Wells（1978）は推定変数を扱った検証よりもシステム変数を扱った検証の方が応用的な有効性が高いと主張している。このような主張のもと、正確な目撃証言を引き出す尋問方法や質問の構造に関する検討が活発に行われている。

証言を得る時には、証人に対して様々な配慮が必要である。例えば、どのような質問を行うかという質問形式も証言の正確性に影響を及ぼすことが明らかになっている。質問形式の影響については、これまで子どもの記憶を引き出すときにオープン質問と呼ばれる自由再生をさせるよりも、「はい」か「いいえ」でこたえを求める質問（クローズ質問，イエスノー質問）が効果的であるとされていた（Goodman & Reed 1986）。しかし現在では、この効果には疑問があるとされている。Ceci & Bruck,（1993）によれば、子どもは質問などに含まれた誘導情報に誘導されやすく、暗示された答えに同意しやすいことが指摘されているため（Goodman & Reed, 1986）、クローズ質問は質問自体に含まれる情報によって答えを暗示しがちであり、誘導されやすいと考えられている。

このような誘導の効果は年齢が低くなるほど強く現れると考えられている。Ceci, Ross, & Toglia（1987）は、3 歳～12歳の子どもに対し、「ローレンという女の子が朝食に卵を食べたらおなかが痛くなった」という話を聞かせた。その翌日、誘導的な情報を与える条件（「シリアルを急いで食べ過ぎておなかが痛くなったローレンの話を覚えている？」）と、誘導しない条件（「具合が悪くなったローレンの話を覚えている？」）のそれぞれにおいてローレンの話についていくつかの質問を行った。さらにその 3 日後、最初に聞いた話と一致する絵を選択させる課題を課した。すると、誘導的な情報を与える条件では、年齢が低くなる程正答率の低下が見られたが、誘導しない条件では、全ての年齢の子どもにおいて一貫して高い正答率であり、年齢による差は示されなかった。このように、子どもに対しては特に質問の形式、あるいは誘導的な質問について注意が必要であると思われる。

子どもに対する聴取で特に注意が必要な事柄は、聞き取りを行う人物の影響である。子どもが証言する場合、誘導する人物が大人など権威のある人の場合にその誘導の影響を受けやすくなることが示されている。Ceci, et al.（1987）は、4 歳児に対し、大人が誘導情報を与える条件と 7 歳の子どもが誘導情報を与える条件を設定し、後の記憶を比較検討した。すると、どちらの条件も誘導のない情報を与えた場合よりは正答率は低かったが、大人が誘導情報を与えた方が 7 歳の子どもが与えるよりも正答率が低くなることが示された。

さらに、たとえ大人が意図的に誘導を行わなくても、大人の応答によって子どもの記憶が変

四天王寺国際仏教大学 図書館
http://www.shitennoji.ac.jp/ibu/toshokan/

四天王寺国際仏教大学 図書館
http://www.shitennoji.ac.jp/ibu/toshokan/

容することを示した研究もある。山本・高岡・斎藤・脇中（1997）では、子どもが体験した出来事を、体験していない大人の聴取者によって想起する、一種の共同想起を繰り返すことによって、子どもの記憶が変容することが示された。この研究では、聴取者である大人の持つ予期や思い込みといった認知的枠組みが子どもの応答に影響を及ぼすことが確認された。このように、聴取者のもつバイアス（予期や思い込み）は子どもに対して無意識的な誘導となる上に、子どもの述べたことを歪めて解釈する危険性があることが示されている。特に、聴取者の先入観が入りやすい状況の場合（例えば、聴取者が子どもを虐待から守ろうとしている場合など）、子どもを誤った答えに導く可能性が強くなることが指摘されている（Ceci & Bruck, 1995）。

木下（1996）によると、アメリカでは、原則的に主尋問での誘導尋問を認めないが、反対尋問と呼ばれる相手方証人に対する尋問では誘導的な質問を認めている。また、州によっては性的虐待の場合に限り、主尋問においても誘導尋問を認めている。オープン質問だけでは、子どもから事実の詳細についての十分な証言を引き出すことが難しい場合が多いため、事実を思い出させる手がかりになるような質問も必要になる（Price & Goodman, 1990）との指摘もあり、子どもへの誘導尋問の使用は状況に応じた慎重な使い分けが必要であろう。

また、繰り返しインタビューを行う場合や、一度のインタビューでも同じ質問を繰り返す場合に、子どもの証言を誤った方向に導く可能性が高くなることが指摘されており、注意が必要である（Ceci & Bruck, 1995）。

このような聴取過程における影響を最小限にするために、子どもに対する様々な聴取法が考案されている。たとえば、成人用に開発された認知面接法（Geiselman, Fisher, Firstberg, Hutton, Sullivan, Avetissian, & Prosk, 1984; Geiselman, Fisher, MacKinnon, & Holland, 1985; Geiselman, Fisher, MacKinnon, & Holland, 1986）を子供用に改訂した面接法として、ステップワイズ面接（Poole & Lamb, 1998）やフェイド・アプローチ（Home office, 1992）NICHDプロトコル（National institute of child health and human development protocol）（Orbach Hershkowitz, Lamb, Sternberg, Esplin, & Horovitz 2000）などが挙げられる。これらの聴取法は既に現場で用いられ、イギリスのように適用が義務づけられているところもある（仲・上宮, 2006）。

また、性的虐待被害児童は、性的な行為についての情報が活性化され、検索されやすくなっている可能性があるため、性的な記憶の活性化の程度を測定できれば、被害の有無を判別することができるという考えに基づき、絵画や人形を用いた投影法のテクニックを用いた聴取法の検討も試みられている（越智, 2005）。例えば、アナトミカルドールと呼ばれる人間の体の性的な特徴を模した人形を用いた場合、性的虐待被害児童は、より性的な動作を再現させることが示されている（越智, 1998）。しかし、アナトミカルドールの使用により、子どもへの誘導が生じ、誤った結論を導く可能性があるとの批判もあることから（木下, 1996）、有効性についての結論は出ていない。このような手がかりだけでは被害児童の識別は難しいと思われるため、さらなる検討が期待される。

さらに、近年では法廷でのコミュニケーションに注目した研究も行われている。その１つが、

四天王寺国際仏教大学 図書館
http://www.shitennoji.ac.jp/ibu/toshokan/

四天王寺国際仏教大学 図書館
http://www.shitennoji.ac.jp/ibu/toshokan/

法律家言葉におけるコミュニケーションの検討である。仲（2005）は、クローズ質問、マルチ質問（１つの質問に複数の事柄が含まれる質問)、代名詞・指示詞（「あれ」、「それ」、「今まで言ったこと」など)、否定や二重否定（「頭を殴ったんじゃないんじゃない」など。証人が「いいえ」とこたえた場合の解釈が難しい)、難しい言葉（年齢にふさわしくない言葉など)、複雑な文法・長文（文が長く、文法的に複雑）によって特徴づけられる法廷で用いられる言葉を法律家言葉と呼び、これら法律家言葉を用いた質問は理解しにくく、答えにくく、メタ認知も困難であると指摘している。このようなわかりにくい質問によって子どもの証言の信用性を低めることは公正でないと思われるが、わざとわかりにくい質問をすることにより、証人の信用性を低めるという反対尋問のテクニックも存在するという（仲，2005)。子どもに対する尋問には一定のルールを設けるなどの配慮が必要であると思われる。

目撃者や証人への質問の方法については、先述のKassin et al.（2001)の調査では、専門家の信用性に関する評価は高い。つまり、質問の方法によって証言の正確性が影響を受ける可能性が専門家の間では広く認識されている。しかし、一般的な常識における評価はそれほど高くないことが示されている。これは、質問の方法が証言に与える影響について一般的な常識に基づく判断では、重要視されていないことを表している。このような専門家と一般市民との認識の違いは、裁判員制度を控える現在の日本において無視できないものであると思われる。特に子どもの証言については、聞き取りの方法や聞き取る人物の影響などを強く受けることが示唆されている。このような事実についての認識を広く一般に共有することが重要であると思われる。

引用文献

Barclay, C. R., & Wellman, H. M. 1986 Accuracies and inaccuracies in autobiographical memories. *Journal of memory and language*, 25, 93-103.

Bartlett, F. C. 1932 *Remembering; A study in Experimental and social psychology.* Cambridge university press.

Bothwell, R. K., Deffenbacher, K. A., & Brigham, J. C. 1987 Correlation of eyewitness accuracy and confidence. *Journal of Applied Psychology,* 72, 691-695.

Brady, M. S., Poole, D. A., Warren, A. R., & Jones, H. R.1999 Young children's responses to yes-no questions: Patterns and problems. *Applied Developmental Science,* 3, 47-57.

Brown, A. L., Smiley, S. S., Day, J. D., Townsend,M. A. R., & Lawton, S. C. 1977 Intrusion of a thematic idea in children's comprehension and retention of stories. *Child Development,* 48, 1454-1466.

四天王寺国際仏教大学 図書館
http://www.shitennoji.ac.jp/ibu/toshokan/

四天王寺国際仏教大学 図書館
http://www.shitennoji.ac.jp/ibu/toshokan/

Ceci, S. J., & Bruck, M. 1993 Suggestibility of the child witness: A historical review and synthesis. *Psychological Bulletin,* 113, 403-439.

Ceci, S. J., & Bruck, M. 1995 *jeopardy in the courtroom: A scientific analysis of children's testimony.* Washington, D.C. American Psychological Association.

Ceci, S. J., Ross, D. F., & Toglia, M. P. 1987 Age differences in suggestibility; Narrowing the uncertainties. In S.J. Ceci, D. F. Ross, & M. P. Toglia, (Eds) *Children's Eyewitness Memory.* New York; Springer Verlag.

Chi, M. T. H.1978 Knowledge structures and memory development. In R. Siegler(Ed.) *Children's thinking; What develops?* Hillsdale, N. J; Lawrence Erlbaum Associates.

Clifford, B. R., & Scott, .J. 1978 Individual and situational factors in eyewitness testimony. *Journal of Applied Psychology,* 63, 352-359.

Davies, G., & Robertson, N. 1993 Recognition memory for automobiles; a developmental study. *Bulletin of the Psychonomic Society,* 31, 103-106.

Eder, R. A. 1989 The emergent personologist: The structure and content of 31/2-,51/2-, and 71/2-year-olds' concepts of themselves and other persons. *Child Development,* 60, 1218-1228.

Eder, R. A., Gerlacj, S. G., & Perlmuttter, M. 1987 In search of children's selves: Development of the specific and general componemts of the self-concept. *Child Development,* 58, 1044-1050.

Eysenck, M. W. 1990 *The Blackwell dictionary of cognitive psychology.* Basic Blackwell.

Fivush, R.1984 Learning about school: The development of kndergartners' school scripts. *Child Development,* 55, 1697-1709.

Foley, M. A., & Johnson, M. K. 1983 Age-related changes in confusion between memories for thoughts and memories for speech. *Child Development,* 54, 51-60

藤崎春代 1998 幼児は園生活の多様性をどのようにとらえているのか：一般的出来事表象の形成と出来事の多様性　発達心理学研究, 9, 221-231.

四天王寺国際仏教大学 図書館
http://www.shitennoji.ac.jp/ibu/toshokan/

四天王寺国際仏教大学 図書館
http://www.shitennoji.ac.jp/ibu/toshokan/

Geiselman, R. E., Fisher, R. P., Firstberg, I., Hutton, L. A., Sullivan, S. J., Avetissian, I. V., & Prosk, A. L. 1984 Enhancement of eyewitness memory ; an empirical evaluation of the cognitive interview. *Journal of Police Science and Administration,* 12, 74-80.

Geiselman, R. E., Fisher, R. P., MacKinnon, D. P., & Holland, H. L. 1985 Eyewitness memory enhancement in the police interview ; Cognitive retrieval mnemonics versus hypnosis. Journal of Applied Psychology, 70, 401-412.

Geiselman, R. E., Fisher, R. P., MacKinnon, D. P., & Holland, H. L. 1986 Enhancement of eyewitness memory with the cognitive interview. *American Journal of Psychology,* 99, 385-401.

Goodman, G. S., Bottoms, B. L., Herscovici,B. B., & Shaver, P. 1989 Determinants of the child victim's perceived credibility. In S. J. Ceci, D. F. Ross, & M. P. Toglia (Eds) *Perspectives on children's testimony.* New York: Springer-Verlag.

Goodman, G. S., Golding, J. M., Helgesonm, V. S., Haith, M. M., & Michelli, J. 1987 When a child takes the stand: jurors' perceptions of children's eyewitness testimony. *Law and Human behavior,* 11, 27-40.

Goodman, G., & Read, R. 1986 Age differences in eyewitness testimony. *Law and Human Behavior,* 10, 317-332.

原聰 2006 この人に間違いありません　目撃証言　太田信夫編　記憶の心理学と現代社会　有斐閣　第Ⅴ部　第１章　209-220.

Home office 1992 *Memorandum of good practice: On video recorded interview with child witnesses for criminal proceeding.* London: Author.

Johnson, M. L., Hashtroudi, S., & Lindsay, D. S. 1993 Source monitoring. *Psychological Bulletin,* 114, 3-28.

Johnson, M. K., & Raye, C. L. 1981 Reality monitoring. *Psychological Review,* 88, 67-85.

Kail, R. 1990 The development of memory in children. W.H.FREEMAN AND CAMPANY New York. ケイル. R. 著　高橋雅延・清水寛之 訳　子どもの記憶　おぼえること・わすれること　サイエンス社

四天王寺国際仏教大学 図書館
http://www.shitennoji.ac.jp/ibu/toshokan/

四天王寺国際仏教大学 図書館
http://www.shitennoji.ac.jp/ibu/toshokan/

Kassin, S. M., Tubb, V. A., Hosch, H. M., & Memon, A. 2001 On the "General Acceptance" of eyewitness testimony research: A new survey of the experts. *American Psychologist,* 56, 405-416.

菊野春雄 1996 被暗示性と目撃証言　目撃者の証言　菅原郁夫・佐藤達哉編　法律学と心理学の架け橋　現代のエスプリ350, 112-118.

木下麻奈子 1996 子供の証言と法的リアリティ―児童虐待における子供証言　目撃者の証言　菅原郁夫・佐藤達哉編　法律学と心理学の架け橋　現代のエスプリ350, 149-155.

Landis, T. Y. 1982 Interactions between text and prior knowledge in children's memory for prose. *Child Development*, 53, 811-814.

Leichtman, M. D., & Ceci, S. J. 1995 The effects of stereotypes and suggestions on preschoolers'reports. *Developmental Psychology*, 31, 568-578.

Lindberg, M. A. 1980 Knowledge base development a necessary and sufficient condition for memory development? *Journal of educational psychology*, 71, 583-594.

Loftus, E. F. 1975 Leading questions and the eyewitness report. *Cognitive Psychology*, 7, 560-572.

Loftus, E. F., & Burns, T. E. 1982 Mental shock can produce retrograde amnesia. *Memory & Cognition*, 19, 318-323.

Loftus, E. F., Greene, E. L., & Doyle, J. M. 1989 Psychological Methods in Criminal Investigation and Evidence. In D. C. Raskin (Ed.) *The psychology of Eyewitness Testimony*. New York ; Springer.

Loftus, E. F., Miller, D. G., & Burns, H. J. 1978 Semantic integration of verbal information into a visual memory. *Journal of Experimental Psychology: Human Learning and Memory*, 4, No,1. 19-31.

Loftus, E. F., & Palmer, J. C. 1974 Reconstruction of automobile accident destruction: An example of the interaction between language and memory. *Journal of Verbal learning and Verbal Behavior,* 13, 585-589.

四天王寺国際仏教大学 図書館
http://www.shitennoji.ac.jp/ibu/toshokan/

四天王寺国際仏教大学 図書館
http://www.shitennoji.ac.jp/ibu/toshokan/

Milne, R., & Bull, R.H.C. 1999 Investigative interviewing: Psychology and practice. Chichester, UK: Wiley. ミルン. R. ・ブル. R. 著　原聰　編訳2003 取調べの心理学－事実聴取のための捜査面接法－北大路書房.

Mori, T., Sugimura, T., & Mirnami, M. 1996 Effects of prior knowledge and response bias upon recognition memory for a story: Implication for children's eyewitness testimony. *Japanese psychological research*, 38, 39-46.

仲真紀子 2005　法廷でのコミュニケーション　―子どもへの尋問　仲真紀子編　認知心理学の新しいかたち　第１章　誠信書房　3-25.

仲真紀子・上宮愛 2006　子どもの証言能力と証言を支える要因　心理学評論　48, 343-361.

Nelson, K. 1996 Language in cognitive development. The Emergence of the mediated mind. Cambridge University Press.

Nelson, K., & Gruendel, J. 1981 Generalized event representations: Basic Building blocks of cognitive development. In K. Nelson(Ed) *Event knowledge: Structure and function in development Hillsdale*, NJ: Lawrence Erlbaum Associates.

越智啓太 1998 アナトミカルドールによる性的虐待時へのインタビュー―アナトミカルドール論争の展望　犯罪心理学研究, 36, 33-46.

越智啓太 2005　記憶研究を応用して犯罪を捜査する　太田信夫編　記憶の心理学と現代社会　有斐閣　第Ⅴ部　第4章 241-250

Orbach Y., Hershkowitz, I., Lamb, M. E., Sternberg, K. J., Esplin, P. W., & Horovitz, D. 2000 Assessing the value of structured protocols for forensic interviews of alleged child abuse victims. *Child Abuse & Neglect*, 24, 733-752.

Parker, J. F. 1995 Age differences in source monitoring of performed and imagined actions on immediate and delayed tests. *Journal of Experimental Child Psychology*, 60, 84-101.

Poole, D. A., & Lamb, M. E. 1998 *Investigative interviews of children: A guide for helping professionals.* Washington D. C.: American Psychological Association.

四天王寺国際仏教大学 図書館
http://www.shitennoji.ac.jp/ibu/toshokan/

四天王寺国際仏教大学 図書館
http://www.shitennoji.ac.jp/ibu/toshokan/

Powers, P. A., Andriks, J. L., & Loftus, E. F. 1979 Eyewitness accounts of females and males. *Journal of Applied Psychology*, 64 , 339-347.

Price, D. W., & Goodman, G. S. 1990 Visiting the wizard: Children's memory for a recurrin event. *Child Development*, 61, 664-680.

Roediger, H., L. & McDermott, K. B. 1995 Creating false memories. *Journal of Experimental Psychology; Learning, Memory, & Cognition*, 21, 803-814.

Ross, D. F., Dunning,D., Toglia, M. P., & Ceci, S. J. 1990 The child in the eyes of the jury: Assessing mock jurors' perceptions of the child witness. *Law and Human behavior*, 14, 5-23.

Schank, R. C., & Abelson, R. P. 1977 *Scripts, plans, goals and understanding*: Hillsdale, NJ:Lawrence Erlbaum Associates.

Shaw, J. S., & McClure, K. A. 1996 Repeated postevent questioning can lead to elevated levels of eyewitness confidence. *Law and Human Behavior*, 20, 629-653.

田宮裕 1992　刑事訴訟法　裕斐閣

Wells G. L. 1978 Applied eyewitness-testimony research; System variables and estimator variables. *Journal of Personality & Social Psychology*, 36, 1546-1557

山本登志哉・高岡昌子・斎藤憲一郎・脇中洋 1997　生み出された「物語」―幼児と大人の共同想起実験から上 発達, 69, 41-57.

四天王寺国際仏教大学 図書館
http://www.shitennoji.ac.jp/ibu/toshokan/